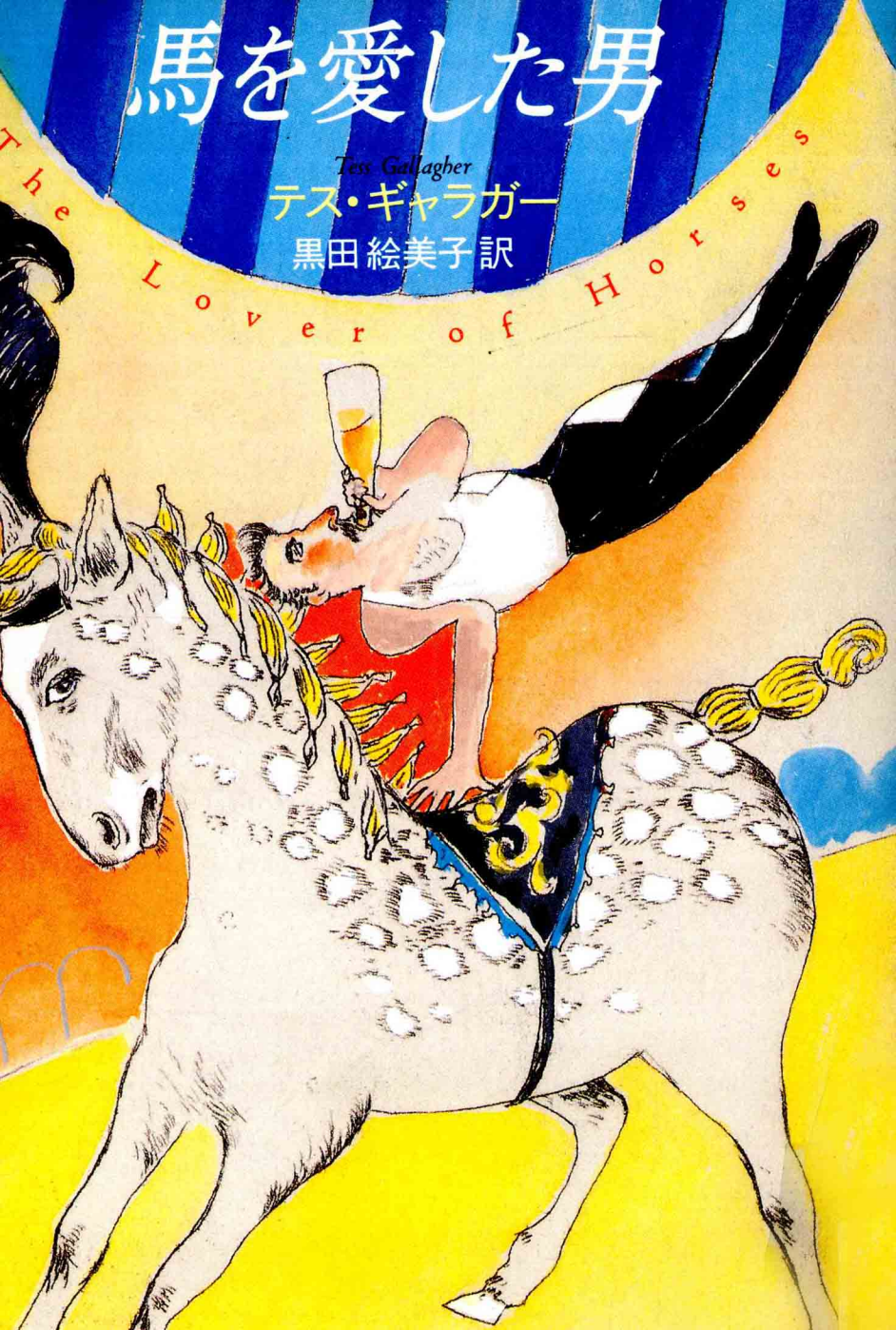


馬を愛した男

Tess Gallagher

テス・ギャラガー

黒田 絵美子 訳





THE LOVER OF HORSES by Tess Gallagher
Copyright © 1982, 1983, 1984, 1985, 1986 by Tess Gallagher
Japanese translation rights arranged with
Rogers, Coleridge & White Ltd. in association
with International Creative Management
through Japan UNI Agency, Inc.
Japanese edition © 1990 by Chuokoron-Sha, Inc.

馬を愛した男

1990年11月10日初版印刷

1990年11月20日初版発行

著 者 テス・ギャラガー

訳 者 黒田絵美子

発行者 嶋中 鵬二

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7

振 替 東京2-34

©1990 検印廃止

Printed in Japan

ISBN4-12-001980-2

印刷所 三晃印刷

製本所 矢嶋製本

馬を愛した男 目次

馬を愛した男

7

死神

27

リコー
逆求権

47

テレビン油

75

なすがまま

99

眼鏡

117

ジェシー・ジェイムズを救った女

133

受取人

153

悪い仲間

165

いくじなし

185

やけくそ

201

娘時代

223

訳者あとがき

248

装画
山本
坪内
成晃

馬を愛した男

レイ
に

馬を愛した男

The Lover of Horses

わたしのひいおじいさんはジブシーだったそうだが、ともかくひいおじいさんというと必ず大酒飲みという言葉がついてまわる。女たちが彼に関する苦い思い出を語るのに、それ以外に適当な言葉があるだろうか。アル中は代々うちの家系につきまとう病氣だった。おそらくこう言うべきだろう。わたしのひいおじいさんはジブシーで大酒飲みだった。

でも、わたしは彼の人生を深く左右したのは酒よりもむしろジブシーの血のほうだと思う。このことでわたしはよく母と議論した。もっともひいおじいさんについての情報の多くは母から聞いたものである。母は祖母から聞いたそうだ。何をやってもどうしようもない男で、功績と云えるようなものは何もないというのが、定説である。だが、彼には一人の子供があったというのだから、かなりの働き者でなければそれだけ養っていけなかったはずだ。それに彼は馬が好きだったらしい。ずいぶんたくさん馬を飼っていて、人から「馬貧乏」と呼ばれていたという。

アイルランドの西にあるコルナモアという、うちの祖先が住んでいた土地へ行ったとき、わたしは初めてひいおじいさんが「ウィスバラ」だったということを知った。これは、馬に話しかける能力を身につけている、ジブシーのある種族の呼び名である。この種族の人たちはどんなに

性格の悪い、危険な馬でも恐れなかった。それどころかそういう野生の馬を小屋に導き入れて、人々を驚かせたりもしたそうだ。

ウィスバラーたちが、馬に接近する何か特別な方法を持っていたのか、あるいは外見どおり、単に馬と秘密の会話を交わしていただけなのかどうかはわからない。とにかく、彼らはささやきかけることで馬を思いどおりに動かすことができた。何をささやいたのかは誰も知らない。なにしろウィスバラーの及ぼす威力の素晴らしさだけは有名で、言うことを聞かない馬がいたら、ウィスバラーを呼んで来さえすれば、その馬は必ずなんでも言われたとおりにするようになり、その日から生まれ変わったようになったというのだ。

誰に聞いても、ひいおじいさん自身が大きな雄馬のようだったと言う。その彼が馬の群れの放たれた草原へ入って行くと、馬たちは一斉に頭をもたげ、彼に呼びかけたそうだ。すると鬣をはやした彼の口が動き出し、何かしゃべっているような声を出す。言葉がわかるはずはないのだが、馬たちはその声を聞こうとぞろぞろ彼のほうへ集まって来る。彼が背を向けて歩きだしても、馬たちがその後をついて来たという。母によれば、そういう時でもひいおじいさんは酔っていたそうだ。ぶつぶつ言いながら、よろよろ歩いていったそうだ。時々彼が道のまん中でびたっと立ち止まると、馬たちもそのうしろにずらっと並んで立ち、彼の唇の動きに合わせて頭を上げたり下げたりしていたそうだ。だが、こういう様子を見た人はいく遠くから見たのだし、こういう話は語り継がれるうちにどんどん変わってくるものだから、今となってはひいおじいさんが馬たちにどんなことを言っていたのか、知る術もない。そもそもささやくことによって、馬がおとなしくなったのかどうかさえも確かではない。また、彼が来たときと同じように突然馬小屋を去った

あと、馬たちがやはり自分たちと人間は理解しあえないという新たな見解に至ったかどうかも定かでない。

唯一、ひいおじいさんと馬たちの不思議な関係だけがいまだに語り草になっている。彼がお気に入りの馬と一緒に川で水浴びをした話だとか、これは母が祖母から聞いたのだが、九番目の子供を作るときに、ひいおじいさんはレッドウィングという名前の雌馬の小屋に妻を連れて行ったということだ。わたしは物心ついて聖書を読むようになったころ初めて、祖母がその九番目の子供で、だから母にそんな話をしたのだということを知った。

ひいおじいさんがそういう風変わりな行動をした人だったという話を聞くと、彼が五十二歳で妻と家族を捨て、たまたま近所に来たサーカスの一団に加わったというのも、まんざら酒のせいばかりではないような気がしてきた。彼には家庭のしがらみから逃れたいという願望があったのではないだろうか。彼の中のジプシーの血がついに頭をもたげ、サーカスに入るといふような、現在に至るまで家族が言いたがらない突飛な行動をとったのだと思う。家を出てサーカスに加わるという発想は、彼が常軌を逸していたことを示しているというよりは、むしろ、彼がおそらくそれほど馬に心を奪われていたのだろうということを表している。

今の社会の中で、ひいおじいさんのことをこんなふうに評価するのは容易なことではない。だが、わたしがそう信じるようになったのはきちんとした根拠がある。子供のころから何度となくひいおじいさんがいかに欠陥人間であったかという話を聞かされてきた。だが、どの話を聞いても共通に湧いてくるあるイメージがある。それは、いろいろなマズルカが踊れるように調教されている灰色のまだらの雄馬のイメージである。とても魅力のある馬で、複雑な踊りのステップ

を軽やかに踏んで見せると、みんなうっとりしてしまふ。リピツアーナ系統の乗馬用の馬ではなくて、サーカスの一団にいるような馬である。

ひいおじいさんはサーカスで踊るようになったそう。その後、母の言葉を借りれば、彼は「完全にだめになった」そう。着替えだけを背中にしょって、愛した馬も（正確には二九頭いた）あとに残して家を出た。このことからしても、よほど強い力が彼を支配していたことがうかがえる。酒の害や見捨てられた妻の恨みつらみなどというような次元のものを越えた何か深遠なものが彼を支配していたのだ。

七年後に彼は妻のもとへ戻って来て、どうかまたここに住まわせてくれと頼み、結局妻に受け入れられて、数年後に死ぬまでそこで妻に面倒を見てもらったという。だが、だからと言ってわたしは彼がやはり凡人だったという結論には至らない。ほかの人はまったく気にもとめていないが、戻って来たとき、彼はサーカスの馬の鞍敷とおもがいの黒い羽飾りを持っていたという。母などからすれば、これは単にひいおじいさんがいかに変わっていたかを表すことさらにすぎない。家もなく、ただの「役立たずの酔払い」で「馬気違い」として、年をとっていく変人である。

鞍敷と羽飾りという奇妙な所持品が何を象徴しているかなどということをわざわざ考えてみようとする人はいなかった。ただ彼は「ばかみたい」に「ベッドの足元にそれらをぶら下げておいたという。そして時々ひどく酔払うと、その鞍敷を肩からショールのようにかけ、羽飾りを持ってマズルカを踊ったそう。居間では踊らず、野原へ出て行って馬たちの中で踊った。馬たちは突然海の匂いをかぎつけたか、あるいは谷間の風向きが変わったときのようにじっと立ち止まって見ている。「酔払いってというのは自分で何をしてるかわかってないからねえ」母はひいおじいさ

んの話をこう締めくくった。「酔払いに話しかけるのは切り株に話しかけると同じだよ」

ひいおじいさんの代でジブシーの血が突然騒ぎだして以来、うちの家族はいろいろなものにとり憑かれるようになった。野心にとり憑かれたり、何かの楽器にとり憑かれたり、あるいはもつと他愛ないものであれば、きのこ狩りとか子供を次々産むとか、または、わたしの父の場合、ごく一般的だが、カード遊びにとり憑かれてしまった。父はうちの家系からはどうせ大した者は出るまいと言っていたが、それは父が想像力に欠けていたせいだと、今でもわたしは思っている。

母のようなしつかり者でさえ、自信に満ちあふれてカードに打ちこんでいる父の魅力を前にしては手も足も出なかった。田舎の母の実家の近所にある友人の家で開かれたダンスパーティーで初めて父に会ったとき、母は父に仕事はなんですかと聞いた。すると父は自分のシャツのポケットに入ったトランプを指して一言、「カードをやるんです」と言ったそうだ。だが、恋というのは皮肉なもので、ほかのことでは極めて实际的だった母が、ほかの誰でもない、この遊び人に惚れ込んでしまったのだ。

父のような人間と付き合うと、普通の人でも何かにとり憑かれるというこの性癖が伝染してしまうのかもしれない。結婚当初は母は父を愛していたが、まもなく彼女は、昔から夢見ていたものと実りある、まともな生活という理想にとり憑かれたのだ。

父のカード狂いには当然のことながら、酒がついてまわった。わが家が貧困生活をかろうじてまぬがれたのは、父がめったに金を賭けなかったからかもしれない。父にはそういう、人を説得する魅力というか、力があつたようだ。来年捕るつもり魚の娘の髪に至るまで、父がそれを賭けると言つてメモを書けば、それで人が信用したというのだ。

ある日、父がはさみを持ちだして、わたしに髪の手を切つてやろうと言つた。チョンチョンと二回、それで終わりだつた。その時、父が手の甲で涙をぬぐつていた姿は今でも忘れられない。首吊りの縄でも持つみたいになつた。わたしのおさげを手につけていた。わたしは十三歳だつたが、それまで髪を切つたことがなかつた。わたしの長い豊かな髪は父の自慢だつた。だが、わたしにとつては長すぎるこの髪は、クラスメイトと自分を隔てるやっかいなものであり、それがなくなつたことはむしろ喜ばしいことだつた。ただ、あんなおさげを誰が何に使つたのか、いまだに謎である。

七十三のとき、父は病氣になり、医者からあと二、三週間の命だと言われた。父はランプで負けどおしだつたせいで病氣になつたのだと信じて疑わなかつた。前の月に父はひどく負け、家にあつた金目のものが、ほとんど母のものだつたのだが、それらが家の中から消えてなくなつた。父はもう一度勝つことさえできれば、医者の宣告を帳消しにしてもらえて、少なくとも八十ぐらいまでは生きられるのではないかという、おかしいことを考えるようになった。

この頃にはわたしはもう家を出て、自分の生活を送つていた。母の教えに従い、野心を抱いた。無鉄砲なことをすることは強く慎もうと、努力してゐた。子供たちの中でもとくに母はわたしに、きつく言つて聞かせた。なぜかという、わたしが五歳ぐらいのとき、あるポニーに異常な執着を示したからだ。母が持ち主であつた近所の人に言つて、そのポニーがどこかの農場へやられてしまつたとき、わたしは親友を失つたように悲しかつた。

だが、わたしが予測できない脇道へ逸れてしまうような徴候は、ほかにもあつた。中でも一番